

ブラジル移民のコイネー形成

ー創始者効果と方言接触理論の検証ー

松本 和子(東京大学) フェイジョー フラビア(東京大学大学院生) 奥村 晶子(東京大学大学院生)
フォンセカ マルコ(イリノイ大学大学院生)

1. はじめに

本稿は、在日ブラジル人コミュニティにおける方言接触とコイネー形成に関する研究の途中経過を報告するものである。日系移民の受け入れが開始されて以来、さまざまな視点から在日ブラジル人に関する社会言語学的研究がなされてきた。しかしブラジル各地からもたらされたポルトガル語の諸方言が日本各地で接触し、さらに日本語との接触も加わりながら、どのようなコイネー(新方言)が形成されつつあるか、という観点からの言語学的調査は見当たらない。本研究はまさにそうした先行研究の穴を埋めようとするものである。

いわゆる「ディアスポラ言語」としてのポルトガル語で使用される R 音の研究は、社会言語学的に非常に興味深い。なぜならば、多様な「variants (変異形)」が言語的環境によって、またブラジルの地域によって異なる分布を見せているため、方言接触とその結果を考察するのに適しているからである。つまり R 音に関する分析は、様々な言語変種をもとに世界中で議論されている「Founder Principle (創始者効果)」(Mufwene 2001)や「Dialect Contact Theory (方言接触理論)」(Trudgill 1986, Britain 2018) が、日本のポルトガル語変種へも応用性を有するかどうかの検証を可能にしてくれる。さらに、本国ブラジルにおける R 音は 19 世紀後半から現在まで変容し続けているため、ブラジル国外に形成されたコミュニティにおける R 音の変化の方向と進度を探ることは、社会言語学研究で議論されている「colonial lag (コロニアルラグ)」(Trudgill 2004)の検証にも役立つものである。

2. 在日ブラジル人コミュニティ

本研究が調査対象としている茨城県常総市は、外国人居住者が人口の 8.1%を占め、その中でもブラジル人が最も多く集住している地域で、その多くが食品工場で就労している。ブラジル人を顧客とするスーパー、レストラン、美容院、スポーツジム、ポルトガル語で利用できる自動車教習所や教会、ブラジル人学校などが揃い、ポルトガル語だけで生活を営む人もいる。なお、日系人であっても、来日した際の日本語能力は挨拶程度の人が多い。

当該地で一世と二世の 138 名を対象に行った Feijo (2016)のアンケート調査を再分析した結果(図 1)、①ポルトガル語は二世へも継承されていること、②日本語能力に関しては、日本の学校へ通う二世と、ブラジル人学校へ通う二世では有意な差があることが判明した。本研究では、常総市において継承・形成されているポルトガル語の言語的特徴を明らかにするため、①移民一世がどのようなポルトガル語の方言を常総市へもたらしたのか、②二世がそれを継承する過程においてどのような変容が観察されるのか等を、主に方言接触と言語変化の観点から精査していく。また日本語も流暢な話者に関しては、言語接触の視点より日本語からの影響が見られるかどうかにも注視する。

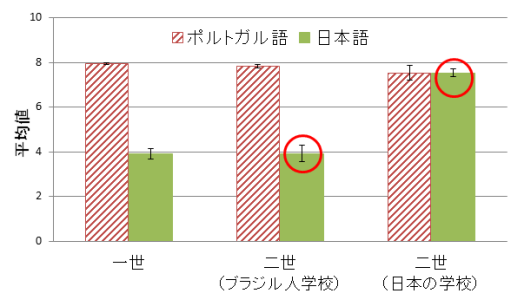


図1: 口頭言語能力への自己評価 (Feijo 2016を再分析)

3. 分析の枠組み

本研究では、方言接触および言語接触に関する以下の理論的枠組みを採用する。まず、Mufwene (2001)の提唱する「feature pool」である。これは方言接触の状況下において様々な方言要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表現したものであるが、言語接触の環境下においては「xenolectal」と呼ばれる「non-native systems」からの言語要素もさらに加えられる。話者はそうした「feature pool」から既存の方言要素を選択(selection)することもあれば、複数の競合する(competing)

方言・言語にはなかった新たな構造を作り出すこともある。こうした考え方を本研究に応用するならば、ブラジルで習得されたポルトガル語の諸方言がインプット要素として移民一世によって常総市に持ち込まれ、現地での交流を通じてポルトガル語の諸方言が接触を重ね、また新たに当該地の日本語変種との接触も加わり、多様な「feature pool」が構成される。二世はそこから既存の形式を選択、あるいは新たな形式を生み出す可能性をも秘めていると想定することができる。さらに Mufwene (2001) は、移民が長期間定住した地域で形成される新たな言語変種が、初期の移民のもたらした方言要素を基盤とする傾向を指摘し、これを「創始者効果」と称している。

一方、Trudgill (1986) や Britain (2018) は、方言接触によって生み出される新しい方言が形成される際に起きる言語的プロセスを類型化し、これを「方言接触理論」と呼ぶ。まず、最も一般的なプロセスとして平準化(levelling)が挙げられる。これは方言混合において多数派の変異形が生き残り、有標(salient)な変異形が消失する現象を指す。この文脈における「有標性」とは、①新天地において数の面で少数派であること、②明確にステレオタイプの対象とされていること(例えば「田舎言葉」と認識されている)などを指す。また、別のプロセスとして中間方言化(interdialectalisation)が挙げられる。これは祖国からのインプット変種には存在しなかった新たな構造が現れる現象であるが、常総市の場合、上記の「xenolectal」として日本語からの言語要素が組み込まれる可能性がある。さらに Trudgill (2004) は祖国から地理的に孤立した植民地では古い言語形式が残ることがあることを指摘し、これを「コロニアルラグ」と称している。ブラジル自体がポルトガル語の旧植民地であり、日本人は比較的新しい移民としてそのブラジルへ移住したものの、30 年前から非日系ブラジル人伴侶も含めた日本への再移住が開始された経緯がある。こうした複雑な経緯を持つ在日ブラジル人コミュニティにおいてもコロニアルラグがみられるかどうか検証していく。

4. 調査の概要

本研究では、茨城県常総市のブラジル人コミュニティにおいて、一世と二世 (18 名, 42 名³) の計 60 名より、①アンケート、②単語の読み上げ、③談話データを収集した。今回は①出生地・居住歴および就学歴に関する質問への回答、② R 音のなかでも「Strong-R」⁴ に関わる単語の読み上げデータに絞って、定量・定性分析を行う。「Strong-R」とは、対をなす 2 つの rhotic 音素のうちの 1 つで、ブラジルポルトガル語では軟口蓋、口蓋垂、声門にかけての後部位置で発音される摩擦音を指し、主に音節の頭、具体的には語頭の(r)と語中の (rr) で現れる(Rennicke 2015: 2)。従って今回の発表では *rádio* (ラジオ) などの語頭の (r)、*carro* (車) などの母音間の語中の (rr) を含む 15 語 (語頭 5 語、語中 10 語) を対象とし、合計 900 トークンを分析していく。

5. 分析

5.1 コミュニティの方言的背景

「創始者効果」を検証するためには、まず常総市への移住を開始したブラジル人移民一世がどのようなポルトガル語の方言を日本へ持ち込んだのかを探る必要がある。図 2 のアクセントに基づいたポルトガル語の方言区画 (Canepari 2017) によると、ブラジルのポルトガル語の方言は「北部」「北東部」「中央部」「ブラジリア」「南東部」「南部」の 6 つに区分される。

次に、この方言区画と照らし合わせ、常総市のブラジル人一世の方言に関する背景を整理していく。出生地・居住歴に関する質問への回答を参照し、臨界期以前に最も長く時間を過ごした地域を話者の出身方言とした。対象としたのは、常総市の初期移住者 102 名である(一世 18 名と二世 42 名の両親 84 名)⁵。二世は親に連れられて来日したことから、当然ながら二世の親も常総市のブラジル人コミュニティの一員(一世)であり、当該コミュニティの「創始者」の方言的背景を理解するためには有益である。整理の結果、常総市のブラジル人コミュニティは、サン・パウロやリオ・デ・ジャネイロなどの都市部とその郊外の出身者が圧倒



図2: ブラジルの方言区画 (Canepari 2017)

¹ Mann-Whiney U Test ($U=93.500$, $N_1=26$, $N_2=37$, $p<0.0005$, two-tailed).

² 紙幅の制限のため、ここでは本稿で関連のあるプロセスだけを取り上げた。

³ 話者がどこで言語形成期を過ごしたかがその後の言語使用へ大きな影響を及ぼすことから、本研究では①日本で生育した二世 21 名と②ブラジル生まれではあるが、幼少期に来日し言語形成期を日本で過ごした 21 名を二世として分析する。

⁴ ブラジルポルトガル語における R 音に関する研究では、言語的環境とそこで出現する変異形の組み合わせに基づき、一般的に「Strong-R」「Weak-r」「Coda」の 3 種類の分類法を採用している(Rennicke 2015)。

⁵ なお、「不明」とした二世 8 名の回答(16 名の二世の親)は余った。本研究で扱う一世と二世は親子関係にないことに留意されたい。

的に多いことが判明した⁶。図3は一世および二世の親に関する回答を上記の方言区画に分けて示したものである。ここから、常総市における初期の移民は、ブラジルポルトガル語の南東部および南部方言話者が大多数を占めることが判明した。こうした初期の移民の方言は、現在形成しつつある移民二世のポルトガル語変種へ強い影響力を及ぼすことが予測される。

5.2 「Strong-R」の地理的分布

まず、図4のブラジルにおける語頭(r)の地理的分布を見ていこう。この地図から、ブラジルでは全国的には声門摩擦音[h]が優勢形であるが、常総市の「初期の移住者」の主な出身地域は、複数の変異形が密集する地域であることが見て取れる。具体的には、南東部方言から南部方言にかけて、①[h]の単独使用地域、②歯茎ふるえ音[r]と軟口蓋摩擦音[x]の併用地域、③[r]と歯茎はじき音[r̥]の併用地域が連なっている。様々な変異形を使用する地域の出身者によって構成される常総市のブラジル人コミュニティでは、諸方言が接触した結果として、どのような新しい方言が形成されるのか、以下検証していく。

5.3 常総市における「Strong-R」の分布

ここから、単語リストの読み上げタスクの結果を見てみよう。表1は、一世の単語リストの読み上げ結果を語頭・語中別に示したものである⁷。これを見ると、リオ・デ・ジャネイロを含む南東部だけでなくブラジル全土で最も広く浸透している[h]が、常総市の一世においても7割前後の使用率を占める優勢形で、南部方言でのみ使われている[x]が3割前後を占める少数形であった⁸。一方、ブラジル最南端でのみ使われている[r]は、常総市の一世のデータには現れなかった。言い換えれば、これは常総市における方言接触の中で[r]は少数派であるため平準化が起り、消滅したと解釈することができる。つまり、これは方言接触理論に即した結果だと言える。

では、なぜ南部方言で広く使用されている[r]は常総市のブラジル人移民一世では用いられないのか。その疑問を解く鍵は、ブラジルのポルトガル語におけるR音の歴史的変遷にありそうだ。Rennicke (2015: 45-46)によると、[r]は19世紀後半から現在まで続く一連の音声変化([r]→[r̥]→[x]/[χ]→[h])のなかで最も古い変異形であるという。つまり、図4は地理的分布という共時的変異を示しているだけでなく、通時的変異が異なる地域で残存していることをも示しており、南部から北部に向かい古い形式から新しい形式へ変化の連続体が地図上で確認できると捉えることができる。一方、「海外移住地」や「ニュータウン」などの新たな土地へ移住を考える人は比較的若い世代が多い。つまり、ブラジルから見ると地球の裏側にある日本への移住を実行した一世は典型的には若い世代であり(本調査の一世の平均年齢は46.19才)、そうした若い世代は古風な変異形を好まない傾向にある。したがって、常総市の一世の間での方言接触における平準化において[r]はそうしたステレオタイプの影響により、残存できなかったと解釈することができる。これも方言接触理論に即した結果である。

もう一つ特筆すべき変化が見られた。日本語が流暢な一世が、*rural*(田舎の)という単語を両唇摩擦音[ɸ]、つまり日本語の「フ」のように発音した。[ɸ]は初期の移民が祖国ブラジルから持ち出した方言には存在しないため、日本語との接触によって組み込まれたと考えられる。これは方言接触理論における中間方言化、あるいは Mufwene (2001)の主張する「xenolectal」によって作り出されたと解釈することができる。

では、次世代ではこうした傾向はどのように継承されるのだろうか。表2は、二世の単語リストの読み上げ結果を語頭・語中別に示したものである。結果は、一世の間で優勢な変異形であった[h]が二世の間では語頭で8割強、語中では9割に

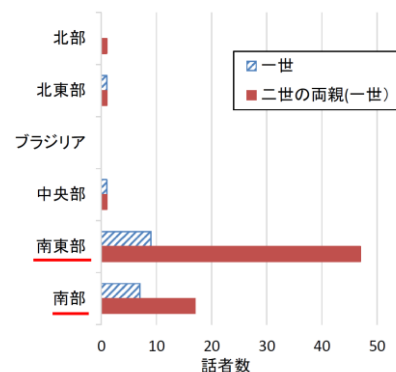


図3: 常総市の初期移住者の出身方言

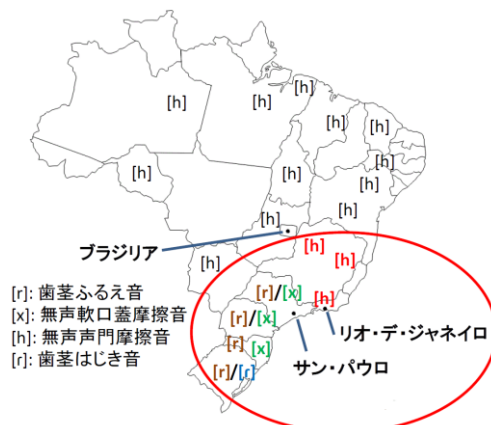


図4: 語頭(r)の地域差 (Noll 2008に基づく)

表1: 一世の「Strong-R」の分布

	[x]	[h]	[ɸ]
語頭 N (%)	27 (30.00%)	61 (67.78%)	2 (2.22%)
語中 N (%)	46 (25.56%)	130 (72.22%)	0 (0.00%)

⁶ 日本からブラジルへ渡った日系民がそうした地域に定住する傾向があったことを考えると、日本国内に誕生した他の在日ブラジル人コミュニティにおいても、類似した傾向がみられるかもしれない。今後の研究に期待したい。

⁷ 表1・表2から「その他」は除いたが、内訳は一世に4トークン、二世に6トークン、言い間違いや不明瞭な発音が見られた。

⁸ 紙幅の制限のため、表1・表2の[x]に有声軟口蓋摩擦音[x̣]と無声口蓋垂摩擦音[x̠]も含めた。

まで使用率が高まり、収束に向かっていることを示している。それとは対照的に、一世で少数形であった[x]の使用は、語頭で1割、語中では1割を切るなど、優勢形の[h]との競争に敗れ、平準化が進んでいることが見て取れる。

さらに、[ɸ]に関しては、二世ではその使用者が増え、日本の学校へ通う児童だけでなく、ブラジル人学校へ通う児童のなかにも使用者が現れた。通っている学校が異なっているが、親が夜勤で留守の間なども共に過ごしていることから、「peer network (友達とのネットワーク)」を通じて、日本語の流暢な話者からそれほどでもない話者へと[ɸ]が伝播していることが推察される。

一方、一世では使用が確認されなかった3つの変異形[r, ʀ, ɾ]の使用が二世の語中でのみ観察された。まず、[r]と[ʀ]は、上記のR音の歴史的変化のなかで最も古いものと、その次に古い変異形であり、移民二世の子供たちがそれらを採用していることは「コロニアルラグ」の可能性を示唆する。これらを使った話者は、日本生まれでブラジル人学校へ通っているが、両親がこうした古い方言形式の残存する地域(図4)の出身者であることから、親から継承したとも考えられる。本調査の単語の読み上げタスクでは一世の[r]使用は確認されなかったが、一世はブラジルでの生活から[r]の持つ古風なステレオタイプを認識しており、単語の読み上げタスクではそれを回避した可能性もある。一方、日本生まれの二世はそうしたステレオタイプを認識していないため、普段通りに発音したことから、こうした世代差が生じたとも考えられる。今後は自然談話データの分析を進め、より詳細に探っていく。

それに対し、[ɾ]はブラジル最南端の方言形として語頭で使われているものであるが(図4)、先に示したR音の歴史的変化(調音位置の後退)の流れにそのまま位置づけられる変異形ではない。[ɾ]を使用した子供たち(とその両親)は当該地域の出身者ではないが、常総市には当該地域出身者も若干名いるため、コミュニティメンバーとの交流を通じて習得したとも考えられる。しかしまた、日本語のラ行の発音が影響している可能性もある。[ɾ]を使用した子供たちはみな日本の学校へ通っており、また[ɾ]が現れた単語は日本語でも「シュラスコ」という定着した発音を持つ *churrasco* (ブラジル料理)も含む。さらに、条件異音の混同の可能性も指摘できる。今回は分析の対象外とした「Weak-r」(注4を参照)では、母音間のシングル (r) は主に[r]として発音される。読み上げタスクで[ɾ]が現れた「Strong-R」もすべて母音間のダブル (rr)であったことから、日本の小学校へ通い、ポルトガル語を学校教育で学習したことのない子供が母音間の (r)と(rr)を混同した可能性がある(例えば *carro* (値段が高い)と *carro* (車)など)。アフリカの旧ポルトガル植民地においても、「Strong-R」が期待される位置で「Weak-r」が使われる、あるいはその逆パターンもあることが報告されており (Bouchard 2017)、ディアスポラ言語としてのポルトガル語に共通する特徴として見いだされる可能性がある。

6. 結論

本稿は、移民一世のもたらしたブラジルポルトガル語の諸方言が常総市で接触した結果、平準化が起こり、それが二世に継承されてさらに収束の方向へ変化が加速する一方で、競合する言語である日本語からの影響が強まるという事例を提供した。同時に、平準化や中間方言化などのプロセスを経た一世の方言が、二世のポルトガル語変種の基盤となっていることを示し、在日ブラジル人コミュニティのコイネー形成における創始者効果の概念および方言接触理論の有効性を実証した。コロニアルラグに関しては、一部の二世による古い発音を除けば、本国ブラジルでの音声変化と同方向へと急速に収束していることから、コミュニティ全体としては本国より「lag (遅れ)」が生じているとは言い難い。かつての孤立した植民地とは異なり、通信機器の発達によって本国の現代風の話し方に触れる機会に溢れる移民社会でコロニアルラグがどのような効果を発揮し得るか今後も注視していきたい。

参考文献

- Bouchard, M. (2017) Linguistic variation and change in the Portuguese of São Tomé. PhD dissertation. New York: New York University.
 Britain, D. (2018) Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg et al. (eds.), *Handbook of dialectology*. Oxford: Blackwell.
 Canepari, L. (2017) *Portuguese Pronunciation and Accents: Geo-social applications of the natural phonetics & tonetics method*. Muenchen: LINCOM GmbH.
 Feijo, F. (2016) A sociolinguistic investigation of the Brazilian community in Ibaraki, Japan. MA thesis. Tokyo: University of Tokyo.
 Mufwene, S. (2001) *The ecology of language evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Noll, V. (2008). *O português brasileiro: Formação e contrastes*. São Paulo: Globo.
 Rennie, I. E. (2015) Variation and change in the rhotics of Brazilian Portuguese. PhD dissertation. Minas Gerais: Universidade Federal de Minas Gerais.
 Trudgill, P. (1986) *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.
 Trudgill, P. (2004) *New-dialect formation: The inevitability of colonial Englishes*. Oxford: Oxford University Press.

表2: 二世の「Strong-R」の分布

	[r]	[ʀ]	[x]	[h]	[ɸ]	[ɾ]
語頭 N (%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	25 (11.90%)	174 (82.86%)	8 (3.81%)	0 (0.00%)
語中 N (%)	1 (0.24%)	2 (0.48%)	27 (6.43%)	384 (91.43%)	0 (0.00%)	3 (0.71%)